

素晴らしい須走を知りたい!

## 「素晴らしい隊」養成講座 第1回講座概要

### 第1部：座学 富士山になぜ登るのか

#### ■日時

オンライン配信

#### ■講師

○宍野 史生 富士道第十二世 神道扶桑教 管長



#### ■講義概要

**質問：扶桑教とはどのような事をしているのか、先生は日頃どのようにお過ごしでいらっしゃるのか？**

江戸時代にはこういう歌が歌われた。「江戸は広くて八百八町 講は多くて八百八講 江戸に旗本八万騎 江戸に講中 8 万人」江戸富士講が江戸市中にたくさんあり、講員がたくさんいた、ということが詠われた歌。沢山の方々が富士山に対する信仰というよりも日常の生活の中で富士山を持っていたのではないかと。講員が多く、また勢力も強かったということだろう。残念なことに、安永 4 年 (1775 年)、今から 246 年前、富士講が最初の布教活動禁止、禁圧を受けることになる。厳しい禁圧ではないが、布教してはいけない、特に武士階級が入講してはいけない、ということから始まり、後に 4 度ほど町触が出た。最後の町触が嘉永 2 年 (1842 年)、今から 179 年前。後に明治 6 年まで富士講は禁止をされた時期があった。明治になり、私ども扶桑教の初代管長である宍野半が役人として静岡県の浅間大社の初代の宮司として赴任し、多くの富士講の皆さんと大変親しくなる。そこで富士講の皆さんからこの禁圧を何とかして解いてもらいたいという願いを受けて 思いに共感をし、この富士講を禁圧をほどこき、その後明治 15 年に勅裁特立、公の一つの神道教団として立ち上げた。明治 7 年に富士講の多くの方々から富士道第 7 世を名乗ってもらいたいと言われた。富士講の各講員が本当に大切になさっていた初代角行様がお作りになった御神實(みかんざね)、御神体の五寸の鏡、そこには浅間宮と彫られていた。これは初代の角行様が神様から御神授をいただき、「こういう鏡を作りなさい、そしてそこに神様が我々の宿り木として宿るから大切になさい」と言われて作られたもの。ずっと富士講に密やかに伝わっていたものを宍野半が預かり、富士道第 7 世を名乗り、富士講の皆さんとともに現在の神道扶桑教を設立した。そして今もその御鏡は私どもの御本殿に奉安させていただき、毎年 7 月になると私たちは背負って富士吉田の北口八合目の天拝宮に奉安をして大勢の講社の方々や登拝の皆さん、登山の皆様方をお迎えし、皆さんの安全そして国家の安全をそこで御祈願し、7 月 26 日に合わせてこの神様は御下山をなさる。下山をした日が吉田の火祭りということである。我々の重要な神事はこのお山神事で、こういう信仰の姿を守りながら、富士講の文化を引き継いでいる。

明治元年、宗教改革のような神仏判然令が発令された。これは誤解を受けていわゆる廃仏毀釈運動に発展をした。本来神仏判然令、そういう制度改革が行われて、富士山周辺の神社も基本的には今で言う旧官幣大社、静岡県の浅間大社が中心となって各地の浅間神社系を統一していくという作業が行われる。北口は江戸時代に富士嶽神社という名前だった。明治政府によって浅間神社に名前を統一した。色々劇的な政策の中一番リーダー格の神社が浅間大社。大社の初代の宮司に赴任した。

高木：須走の浅間神社の周辺のお寺さんが大体なくなってしまった。

米山：廃仏毀釈はかなり強く解釈した方が御殿場や須走にいて、須走の場合、寺院は御殿場の寺院と

一緒になった。須走ではお葬式からすべて神道で行うように統一される。そこまで強い動きがあった。地域のお寺が無くなったのが須走の特徴でもある。

高木：西寿院、永昌寺、香積寺の 3 つのお寺さん全部はなくなり、千体仏などの仏様も移動させられる残念な歴史がある。

米山：強く神道の方に動いたことが地域の特徴である。

宍野：確かに富士山も、その時に明治政府が発布した神仏判然令に基づいて、明治 7 年 7 月 25 日に富士山の各所にある仏さんの名前を冠したものなどもすべて神道式に改めた。御頂上の大日堂や薬師堂が今で言う、奥宮、久須志に代わっている。そして釈迦割石(しゃかのわれいし)や賽の河原を安の河原とか名前も神道式に変えたというのは、その時の政策に基づいて行われたことではないだろうか。ただ富士講は、その時の政策で逆に布教禁止がほどけ、それからもう 1 段階富士講の活動などが活発化するということ。扶桑教はそれをまとめながら今に至る。

### 質問. なぜ禁止されたのか？講がダメだったのか、それとも富士山に対する思いがダメだったのか？

A. 禁止の最初は 1775 年の安永年間。大勢の講員が増えたことにある。もう一つは、食行様は寛文 11 年(1671 年)にお生まれになり、1733 年享保 18 年に富士山の八合目の天拝宮のお宮、すなわち北口七合五勺烏帽子岩の場所で入定なさる。即身入定と言うが、31 日間食事を絶ち亡くなる。1 日 1 杯のお水だけをいただき、断食をして最後には亡くなる。その前年に西日本で享保の飢饉がある。その影響を受けて江戸市中ではお米の値段が上がり、日本初の打ち壊しという民衆が店を襲う事件が起こる、経済的にも大変不安定な時期。その翌年であった。食行様は社会に対して大変批判的な考えを持ち、なおかつ食行様の考えの中に四民平等という考えがある。士農工商というピラミッドの形の社会構造のなか、ピラミッドではなく、台形をイメージして縦に士・農・工・商とした。何よりも人として大切なことは、徳を積むこと、積徳。これが一番重要なことだと唱える。そして積徳とは武士は武士として街を守り、治安を守り、人民の安全を守ることが一番の使命、ミッションである。それに専念し国民の安心安全に導くということが一番重要で、これが徳を積むということ。その次は農、農民は丹精をこめて安全で美味しい作物を作る。そして多くの方にそれを食べて元気をつけてもらうことが一番重要でこれに専念することは得を積むということ。工商の工は、色々な工芸品の製作、大工等の方々は大勢の方のために匠の技を駆使することが徳を積むこと。商は、匠が作ったもの、そして農民が作ったものを安価な金額で世の中に流通させることが大変重要な徳。この徳を積む、積徳をすることが人として一番重要なことだと言った。士農工商すべてが各々の務めを果たすことが重要である。もう一つ人が、昔は女人禁制で特に富士山は三合目から上には女人は上がれなかった。当時女性は穢れていると言われていた。穢れを持って登ると山が荒れる。荒れると、農作物に影響するので国家的に大変なこと。山が荒れないように霊山と言われるところは女人禁制だった。女人の穢れは血の穢れ、いわゆる月経が穢れだという時代があった。食行様は「三十一日の御巻」に書いているが、その事を花水(はなみず)と書いて表現している。真にこれはありがたいこと、男である我々も女性の花水がないとこの世に生まれ来ない。だから女性が穢れていることは絶対にありえないと言って、一説には三合目にいる山役人(中宮役所の男性で、女性を登らせない役目)の目を盗み、女性に男装をさせて登らせたという話もあるようだ。男女同権、そして四民平等を唱えた食行様。そして、江戸の物価高騰、暮らしづらくなった時に、それを受けてお祈りで収めるよう我が命を賭して、富士山に入定して命を捧げて人民を守るという行為が江戸町民の心を動かした。これから一挙に江戸富士講が人気を博し、大勢になる。もう一つは、武士階級に食行様の考えに賛同する人たちが出てきた。記録として我々が掴んでいるのは雲州公、松平様、今で言う

松江のお殿様が正絹、シルクの大きな 3m ぐらいの染めの旗を納めた。「食行尊師御尊前」という雲州公の名前の入った旗がある。お大名がご自身の名前を書いた旗を納めるのは、当時でいえば大変なこと。お大名、武士階級にこういう四民平等、男女同権の考えが広がることを幕府は大変に危険視したのではないかと感じている。

**Q. そもそも富士山をどのように考えていたのか。現代人から見ると、富士山も山、スポーツのように登山するが、当時の富士講の方たちはどう捉えているのかということをお教えいただきたい。**

A. 富士山は最後の噴火が 1707 年の宝永の噴火で、それまでいくつも噴火する、火を噴く山だった。秀麗な美しい山であるにもかかわらず時として火を噴く山ということが、神の力、仏の威力と皆さんが感じたのだろう。だから昔、富士山は下から眺めて遥拝をする、拝む山だった。静岡県浅間神社は富士山を下から拝むお宮。これが一番古い浅間神社だと言われている。本来は下から、噴火や天変地異がないように我々を守ってもらいたいというのが富士山信仰の第 1 弾である。そして今年で 480 年になるが、天文 10 年にお生まれの藤原東覚角行様が出現され、18 歳から 14 年かけて富士山を登った。それまでに富士上人などが登った記録はあるが、角行様は道を作りながら 14 年かけて登った。御年 32 歳。今から 419 年前で、元龜 3 年(1572 年)6 月 3 日、やっとお頂上に立てることができた。1 年目は一合目の草を払い、二合目まで上がれるようにして、そしてまた冬を迎えて翌年になるとまたそこから三合目まで草を払い、少し歩きやすいように石を揃えたりしながら、道を作られた。ありがたいことに実はこの 419 年たった今もこの吉田口、北口の登山道は角行様が開いた道そのままである。そのコースを私たちは未だに使わせていただいている。角行様は富士道、富士講という富士山信仰の信仰としてのいわゆるソウルとして道も作られたけれども、同時にロードの道自体も作られて 14 年かかき元龜 3 年にお頂上に立たれた。道という言葉の中のロードとソウルを角行様が作られた。その後は、この道を使って大勢の方々が登って拝む、という信仰形態が変わる。なぜならば、あの美しい富士山に登って、そして拝めば、天の神様に一番近いところをお願いを届けることができるのではないかと当然みんな考える。そしてその後、富士信仰はその富士山に登って、富士山の大自然の中に我が身を投じることにより、神様と一体、自然と一体になるということをお考えしていたのではないかと思います。富士信仰の形の変化とは、下から拝む山から富士山に登って富士山の胎内に身を投じて、多くの祈りを捧げるとなったのではないかと。

**Q. 物理的な道を作り出す上で山室があるなど、当時から崩れない安定した場所に作ったことが噴火をしても現在まで道が残っていることだと納得がいく。吉田の浅間神社をスタートに山頂に至る道が作られたのは間違いないのでしょうか？**

A. ほぼ間違いないと思う。今の登山道の入口は北口浅間神社の向かいの右手裏側に三霊者、食行様、角行様、光清様の三名の大先達をお祀りしたお宮がある。そこに楼門のような門があり、中野茶屋、大石茶屋を通り、一合目の馬返まで歩く。この馬返から、今も跡が残っているが祓い所があり、講社は祓いを受ける。そして一合目の鈴原、二合目の御室と 1 合目ごとにお宮がある。一つ一つお宮をお参りしながら、今で言う山小屋の茶店を歩きながら登った。東口は、横浜、三浦あたりの西の講社が大概上がっていた、と先達から聞いている。東の講社はそのまま北へ登り、府中、甲州街道 20 号線にわたり、高尾に登ってから吉田へ入るというコースを通った。三浦半島から西の講社は、そちらを通らずに東口を使って、恐らく東海道を通っていくのかと思うが、東口・須走口から登って下りた。当時、2 つの登山口が大変賑わったと聞いている。江戸の富士講は、信仰の登山でもあり、一生に一回は富士山とお伊勢さんと金毘羅へ、これが江戸三大詣である。この三大詣でに行きたい、せっかく行くならあそこも寄ろうとなるので、吉田口から登り、下りは東口へ。東口へ下りて、大申(大申学)、小申(小

申学)、米山館、江戸屋、菊屋にて砂を落とす。その後コースは聞いた所によると、足柄の最乗寺の道了尊、大山にもお参りする。豪華な講社は少し足を延ばして江ノ島へ行き、弁天様もお参りして、品川から上って帰る。大変ゴージャスな富士講のコース取りであったと言われている。信仰は祈りでもあるが、江戸町民の大きな楽しみ、レクリエーションの一つでもあった。楽しみだけで上がるのは町の人には出してくれない。そこで一番重要なのは町の方々の祈りを代参すること。代わりに自分が受けて富士山の神様にお願いをしてきてあげた、事がすごく重要。当時、一番大きい祈りは安産と子育て。これは富士山の神様が木花開耶姫命様、天孫をお生みになられた神様でもあるが、秀麗な姿がまことに美しい姫神様に江戸町民は見たのであろう。木花開耶姫命様に祈願をすると安産で、かつ子どもが元気に育つということが町民のご婦人の中では一番の御祈願。男性陣としては町内の婦人連合会のミッションを一気に受けていくので、大変力が入ったコースであったと思う。

四合目に御座石(ございし)がある。穴が開いていて、その穴に耳を当てて聞いてごらん、と先達に言われる。何も聞こえないと言うと、それはまだ修行が足りないと言われる。先達は波の音が聞こえるはずだと言う。それは江ノ島の洞窟、弁天様に繋がり、波の音が聞こえなければ、まだ修行が足りないと言われながら、真剣に耳をそばだてたことがある。富士山登拝において特に重要なのは高尾。江戸富士講は、高尾の蛇滝、もしくは琵琶滝で滝に当たって禊をし、精進潔斎に入る。そして東口を下りて、その後、道了尊にお参りをして、その後大山へお参りをし、江の島へお参りをする。富士山は色んな地域とも関わっている。この全ての祈りの道が信仰の道である。また富士山の富士講の文化の道である。山へ登るためのロード、信仰の心を持つソウル、同時にライン、いわゆるサークルも一つの道の構成であると思う。

**Q. どのぐらいの期間でそのラインを巡っていたのですか。**

A. 8 日間から 12 日間くらい。

A. 大変詳細な資料が残っている。富士講の大本は大体日本橋。日本橋にある三大元講、山包、山三、山真。日本橋から出て 1 日目には高尾まで歩いたかどうか。帳面が残っている。行ってそのまま帰る講社もあるし、ぐるっと回って帰る講社もある。

**Q. 巡拝の道づくり事業は、スポーツ登山のように登るだけではなくて、先生がおっしゃった富士山に手を合わせるなど、想いや祈りを持ちながら登る、そういう環境を作る事業である。4 月から 11 月まであざみラインが通行できるので、その間でも来て富士山と親しくなり、理解するような環境を作りたい。小富士に扶桑教の祠もあるので、歩いてお参りに行くことがメジャーになればいいと思う。先生から見て五合目という本当に狭い区間で祈り体験はできるとおもいますか？**

A. できる。江戸時代はあざみラインもなかった。町内でどうにかできないのかと江戸っ子の単純な考えがあり、彼らは疑似体験をするために富士塚を作る。東京都内に 30 カ所ぐらい残っている。周辺の関東近辺もあわせると、もっと沢山富士塚が残っている。私どもの東京の本部の境内地にも富士塚がある。富士塚には一応定義がある。その一つは、黒朴石、すなわち富士山の石を使う。ほんのちょっとであれ、全体であれ、少しでも富士山の石を使うということが第一条件。第二条件はお頂上に浅間様をお祀りする。三つ目はそれに登れる。登れないとダメ、ただの築山。お頂上に登れる道を作ること。これが最大の条件。これがあると富士塚と呼ばれる。黒朴石は富士山の石。当時、それを江戸へ持って行くのは大変な作業だったと思う。江戸町内では隣の町内と高さを競った。高さで負けると、「お前の富士塚はうちより立派で高いかもわからないけれど、黒朴はお頂上しか使っていないだろう？うちはちっちゃいけど五合目からは全部黒朴石、富士山の石を使っているから、こっちの方が偉いんだ」とか他愛もないことで競い合った。富士登山は、10 日間近くかかるので高齢者、子供、婦

人は大変である。町内に自分たちの富士山を作り、そこに登ることによってお頂上からお浅間様を遥拝する、遠く拝む。富士山に登った疑似体験をしてご利益が得る。7月1日山開きだが、東京都内の富士塚も7月1日、その前後の土日に地域の方々がお山開きとして習俗的な信仰を守っている。いわんや、須走の五合目まで行けば半分以上の登ったことと同じ。小富士までの道は、森の中で気持ちがいい。高低差もなく、高齢者もゆっくりであれば十分登れる。小さい子供も行けるので安全だ。着けば開けた所があり、お天気が良ければ美しい富士山のお頂上が望める。そのコースをもって富士山への一つの登拝、登山が達成するという意味ではすごく気持ちのいいコースではないかと思う。

高木：上まで行かなくても五合目の小富士で遥拝、登拝を体験し、登拝証明書をもって帰ってくれば、楽しい富士登山になる。

穴野：私どもの講社でも昔は八合目にある天拝宮から上に登らない講社があった。八合目の烏帽子岩の天拝宮でお参りをしたらそのまま下りる。下りる時も、私どものお宮からは吉田口への下山道と須走口の下山道は八合目で一緒になる。八合目から登る道と下る道は一緒。我々も下りて来る時は、江戸屋の屋根を目印で、江戸屋から戻ると自分の天拝宮へ戻れる。あそこは扇の要で八合目から上がらない。なぜ上がらないかと言うと、ちょうど富士山の火口口の御鉢の底が八合目である。御鉢の底に浅間様、神様がおいでになる。お頂上まで登ると神様を足元に拝むことになるので、失礼だから、八合目からまっすぐお山を向かうと目の前に神様の御身があるので、ここで拝むのが一番ありがたいと言われて八合目で拝み、御判をもって下りる方がいる。昔から七合五勺は小頂上、小さな頂上と呼ばれていた。今も小頂上にお参りになったという登山証明を出している。八合目からは2時間半くらいだがきつい。お天気が悪いと八合目から上は厳しいので、小頂上の登拝証明書を出して、ここまでくれば神様と同じ高さまで来たので、しっかりと拝んでお帰りになればお頂上と同じだとなる。ある講社はそこから上は上がらないと決めていた。小富士でも登山証明は、皆さんがそれを楽しみにして、富士山に少しでも親しんでもらえるのであれば凄くグッドアイデアだと思う。

高木：7月から9月までが登山シーズンに集中するのではなく、もっと分散して富士山を大切にするような環境が生まれたいかと。須走口ではそういう形のことを目指したいと思っている。

#### **Q. かつては須走にも御師がいた。御師とはどのような役割を担うものか？**

A. 大変密接な関わり。当然ながら講社があり、先達、講長がいる。今で言えば御師の役割は、山へ登るための最終的なベースキャンプ。最後に必要なものを整え、情報も収集する。事実上信仰とはいえ、大変環境の厳しい山へ登る意味では準備万端を整える。御師の力に頼らざるをえないくらい大変重要。講員が安全に登り、下りてくることがなによりも大事なことで、その強力なサポーターである。御師は御師自身も講社に安全に登り、下りて来ることに祈りを上げてくれるという意味では、登る前の祓いや神楽などが御師の重要な役目であった。同時に時としては色々な御札や神様に関わるものを発行し、頒布する。吉田の御師の場合だが、一日一講。他の講社を相泊まりさせない。5人であれば、30人であれば、一日一講しか受け入れない。講社は、毎年行く御師の所が決まっている。定宿、定御師である。地域的に決まっている場合がある。千葉の浦安あたりは、御師で言えば堀端屋で、その地域の講社は全部堀端屋だと決まっている。お山が閉まった後は、御師も自分の地域の所に訪問し、富士山の文化活動、布教活動に寄与していた。お互いの信頼がないと安全に関わる問題なので、パートナーとしても信頼関係があった。当時も色々なコースを行ったと思う。一応起点が日本橋ということであれば、日本橋から高尾、高尾から猿橋、高尾山の山頂から小仏山の尾根づたいを通過して、小仏山から下りると下に弥勒茶屋という小さな茶屋がある。旧甲州街道を廻ったわけではなく、高尾山を直行し下

に下りる。下りると相模湖の弁天橋に出る。そのまま猿橋に出て、吉田に入り、お山へ上がり、頂上から八合目までは同じ道を下りる。そうすると山を割らない。違う道から上がって、違う道に下りると山を割ると言って、嫌う。吉田口から登って、須走口へ下りる場合だけ山を割らない。なので、須走へ下りて、石尊大権現、道了尊、大山へ行き、江ノ島へ行く。これはメジャーなコース、ベースの道だと思う。私は十分できると思う。それを追っかけていけば面白いと思う。そこに残っている江戸の文化や地方の文化がまた江戸へ渡って残っている場合もあるので、それを検証していくと、その当時の人たちの生活と習俗が浮かび上がってくるのではないかと期待する。

**Q.最後にこれからの方たちに対して富士山をどういう風に見てほしい？特に若い世代の人たちは、きれいなお山だとは思っているが、若い人たちに向けてどのように発信していけばいいと思う？**

A. 竹取物語は日本で最古の物語、文芸作品だとも言われている。そこで富士山は最後に重要な役割を担う。傷心の帝が不老長寿の薬があつて仕方ないと、お山の上で焼く。その煙が富士山の煙だと言われる、ドラマティックに富士山が出てくる。木花咲耶姫命様の神話に基づく話や、秦の始皇帝が徐福をして不老長寿の薬を探しに行く徐福伝説もある。東の海の先に扶桑の島がある。扶桑の島には扶桑の木が生えている。扶桑の木の実を食べると不老長寿を得るので、この木の実を取ってこいと言われ、徐福は数十艘の船を従えて、この東の海へ進んだ。これが日本であるという不思議な夢のあるお話などがある。こういう逸話を特に子供たちに知ってもらうことはすごく重要なことだ。登山をしながら文学的なものから文芸的なものも含めて親しめるプログラムは楽しいのではないかと。少し年齢を重ねた、いわゆるこれから日本を背負う若い青年世代に少し富士山の見方を違った見方で見てもらう。先ほど申し上げたように、富士山では富士講文化のなかで角行様、食行様、光清様のお三方が先達として大変重要な役目を果たされた。特に食行様が四民平等そして男女平等、角行様は何を言ったかという、「足るを知れ」、「不足こそが富貴だ、幸せだ」と言っている。家康公と角行様が人穴で会っている。その時に角行様は家康公にこう言っている。「慈悲を持って万人を救い、情けを持って人を助け、堪忍を持って身を納め、不足を持って国を治め、忠孝を持って家を整え、正直を持って鏡として一切の政治を行おうこと」と諭された。「不足の教え」は単に足りない、もう少し欲しい、というのが決して不足ではない。「不足を持って国を治める」というのは、あなたは民の為にいい国を作らなさい。しかし、それに満足をしなくて国を治めなさい。もっと自分にできることを常に研究しなさいという意味の不足。欲しがる不足ではなく、自分が足りない不足を常に思うことが本当に重要な事だという考え方。角行様の教えの中で重要な言葉の一つでもある。食行様は、四民平等、男女同権ということを言った。この教えは後に、埼玉の丸鳩講という講社の小谷三志という先達に深く伝わる。小谷三志のこの食行様の考え方、「共に助けなければいけない、そして共に徳を積まなければならない」という積徳の考え方は実は小谷三志と交流もあった二宮尊徳とともに共有することになる。そして二宮尊徳はこの富士講の食行様の考えや富士講の人たちの理念、理想に共感をして後に報徳思想、百行にわたる報徳訓を作った。掛川にある大日本報徳社の玄関には「道德門」という門がある。「道德」という言葉と「経済」という言葉両方が書いてある。この門は、経済はあくまでも道德と協調しないと行かない。我々は今お金さえ儲ければいい、お金さえあればどうにかなる、お金第一主義になったけどそれではダメだということが報徳思想の中にはある。富士山の信仰の根源、考え方というのは実はそのようにつながっており、我々はそれをまた十分に理解してこれからこの世界的なグローバル経済社会に向かっていかなければならないと思っている。

## 第2部：体験「五合目での体験」

■講師：秋元 瑞穂氏 神道扶桑教 割菱八行講協会 教会長

■講義・体験：富士山五合目

高木：割菱八行講の説明をお願いしたい。

秋元：割菱八行講という富士講は、私で十五代目。東京都の江戸川区で活動させていただいている。富士講自体は江戸時代から面々と連ねており、富士山を信仰するという形で毎年7月、8月に御登拝させていただいている。

高木：今年はどうだった？

秋元：コロナの影響で残念ながら御登拝できなかった。来年は是非とも御登拝できるように我々も念じている。

高木：先達とはどういうことなのか？

秋元：先達は字の如く、先に立つという、講の代表者である。先達と講、講元と申して金銭などを取り扱う元がいて、先達はそこの教会長のような形でやらせていただいている。講をまとめて、富士講も宗教なので、私が講の人たち伝えていくという形やらせていただいている。

高木：富士山へ登るときには先頭に立って皆さんを率いる？

秋元：先頭もそうだが、やはり遅れる方もいるので安全に御登拝するため、前に立つときもあるし、列の最後に行く事もある。見渡さなくてはならない。

高木：戻られても富士講の教えを広めていくという役割がある？

秋元：御登拝させていただく前に、教会で拝み、無事に御登拝出来ますよう拝み、戻ったら全員無事に御登拝でき、ありがとうございましたという形でさせていただく。

高木：登る時には先達さんは何人位いる？

秋元：先達は一人。過去においては富士講も江戸時代から明治、大正、昭和初期、戦争前ぐらいから戦後ぐらいには盛隆していて人数も多かったが、だんだんと講員も少なくなってきている。そのため、まとめるというほどでもないが、ぼちぼちやらせていただいている。

高木：昔はどのぐらいの方が登られていたのか？

秋元：江戸八百八町と言われ、八百八講というぐらいに富士講が盛隆してたという話は聞いている。

高木：今は1回にどのぐらいの数の人が登っている？

秋元：管理できる中で、10名以内で御登拝させていただいている。過去において講員が200名ぐらいいいた時も代表者として集金し、そのお金で20人とか30人くらいで御登拝させていただいたと思う。

高木：秋元さんの今日のこの装いは富士山に登られる時の格好になる？

秋元：そはい。頭には宝冠というさらしを巻く。頭のでっぺんに富士山が描かれている。これは先代から受け継いだ宝冠で、先達の目印で、先達だけが巻く。講員が具合が悪くなったり、怪我をした時はこの宝冠で包帯代わりやロープ代わりにする。

高木：宝冠は神聖なもので誰にも触らせないということではない？

秋元：神聖なものは神聖なものだが、とっさの時にはそういう役割もする。

高木：今日のお召し物の紹介をしていただきたい。

秋元：行衣と言ひ、富士講に限らず山岳信仰の方はこういう形の装束で登られると思う。白装束と申して、昔からお山、神聖なところに登るには身も心も白。白い装束で登っている。そういう気持ちで、六根清浄の、身も心も全て悪い事、自分の罪、穢れをなくそうということに登らせて

いただく。装束に付いているこれは印で、登った印。各年に好きな所に御朱印を押す。浅間神社さんにも行き、御朱印を頂いている。今は足袋で登りやすくなっているが、江戸時代、昭和になっても草鞋に素足で登られる先達さんもいた。血だらけになると言っていたが、それがご修行だということで、草鞋で登られた先達さんもいる。

高木：手に付いているものや、脛(すね)に巻いている白いものもお祭りなどの脚絆とは違う？

秋元：お祭りでは派手に文字が書いてあったりするが、これは真っ白の行衣なので違うものになる。

高木：富士講の作法は書面で残っている？

秋元：ほとんど残っていない。「お伝え」という口承。各講が口伝で伝えている。作法は各講によって違う。六根清浄を唱えながら登るのは同じ。

高木：口伝で特徴的なことはある？

秋元：発祥が食行身禄様なので、身禄様の教え。人には嘘はつかない、商売、仕事に精を出す、質素に父母様、ご先祖様を大事にする、ということが私どもの講の教え。もともと富士講自体が、生活に根差した衆民に広まっていったもの。お山に御登拝するときに、今までの罪・穢れを捨てなさい、気持ちを新たにしなさいということも含まれているのではないかと思う。

高木：そういう意味では富士山は本当に懐が広い。

秋元：御心の広い富士山ということで、皆さん御登拝している。

高木：富士講の「六根清浄」と唱えながらの歩き方などを教えていただきたい。

秋元：「六根清浄」を唱えながら御登拝させていただく。これは雨が降っても、どういう天候であっても「六根清浄、お山は晴天」と唱えながら登らせていただく。

高木：雨が降っても晴天というのは？

秋元：それは心の部分。

高木：心がいつも晴天のように明るく登るとのこと？

秋元：そう、心も全て明るく登らせていただくということもあると思う。

～「六根清浄 お山は晴天 六根清浄……～ 小富士まで実際に歩く

<小富士にて>

山頂、祠に向かい、実際に拝む様子

